



NEWS LETTER かながわ

2019年度第1号(通巻第25号)

2019年7月 神奈川支部 発行

連絡先 e-mail:jacdpkanagawa@gmail.com

巻頭言

神奈川支部事務局長 武部正明

「それは、誰が言ったこと？」

最近、「それは、誰が言ったこと？」という問いかけをすることや、他の方が問いかけをされているのを聞くことが多い。例えば、Aさんが報告をし終わり、その報告の中で述べられた発言について、参加者のBさんが報告者のAさんに問いかけるといった場合である。ケースカンファレンスでは、そんなに不思議なことでもないが、実は臨床現場での事案のみならず、運営会議や経営会議はもちろん、他部署の会議に出席した報告を上司にする等の場合でもこの問いかけを聞くことがある。時には、友人や家族との団欒や雑談にも当てはまる。つまり、人間関係が生じた事柄を第三者に報告する場合には、当然のことながら一人称、二人称、三人称を（自動的に）使い分けながら話す。例えば「今日、叱られちゃった。あーあ、明日行くの嫌だなあ…」に対して、相手が「誰に言われたの？いつものXさん？」というような、いわゆる愚痴も該当する。

私たちのような対人援助を業務とする場合には、殊更その使い分けを「意識的に」することが求められる。本人、保護者、きょうだい、その他親族、保育所・幼稚園や学校の先生、医療機関の主治医など、発達臨床において典型的な事例を想定しても、これだけの登場人物がいる。加えて支援者の一人である「自分」がいる。この「自分」が、多くの情報を集めた後、自身の見立てと方針案を立て、どのような役割を求められているのかを判断して、最終案を相談者（あるいは、他機関）へ提案するという最初の作業には、多くの人間関係の整理が含まれる。

この作業がうまくいかないと、ケースカンファレンスにおける検討や助言が機能しにくくなる。誰の発言か、誰の不安か、誰の主訴か、などが明確にならないければ、アセスメントが定まらず、次に自分が何をすることが決まらないからである。難しい事例になると複雑に絡まった要因を整理しきれず、ついついその行為の主体者が曖昧な認識のままになりやすい。そのため、常に主語を明確にすることを心がけて、自分たちの臨床を振り返るようにしている。専門性を磨くということは、こうした技術研鑽も含まれると思われる。ご興味のある方は、下記文献をご参照いただきたい。

「医療・保健・福祉・心理専門職のためのアセスメント技術を高めるハンドブック」(近藤直司著)

神奈川支部総会報告

2019年度の臨床発達心理士会神奈川支部定期総会は、5月19日（日）に鎌倉女子大学大船キャンパスにおいて開催されました。当日出席の49名に加え72名分の委任状により、会員総数252名の3分の1を超えたため、総会成立となりました。

総会に先立ち久保山支部長から挨拶がありました。昨年度より心理の国家資格である公認心理師が誕生しましたが、臨床発達心理士は“発達的な視点に基づく支援”の専門家として、今後も活動を継続していくとのお話がありました。

総会では初めに議長の選出があり、推薦によって相模女子大学特任教授の大里朝彦先生が議長に選出されました。

続いて、2018年度の活動報告と決算報告があり、それぞれ承認されました。2018年度の活動報告の特記事項として、神奈川支部のホームページを改修し、スマートフォン対応となった旨の報告がありました。

その後、役員を選出がありました。2019年度は役員の入替わりはなく、昨年度と同じメンバーで実施していくことが承認されました。

続いて、2019年度の活動計画、予算案が提案され、それぞれ承認されました。特記事項として予算案では、通信費としてサイボウズ利用料が新たに計上されています。これまで役員間では主にmailでやり取りを行ってききましたが、様々な打ち合わせが同時に行われることもあり、とても複雑なやり取りになっていました。そこで、より効率的に役員間で情報共有や打ち合わせができるようにサイボウズを導入することとなり、予算として計上させていただくことになりました。

最後に、神奈川支部の規約の改定が提案され、承認されました。一般社団法人臨床発達心理士認定運営機構の役員の任期が2年ということもあり、それに合わせて神奈川支部の役員の任期を3年から2年に修正しました。現神奈川支部役員は今年度で2年目となり、次年度改選が行われることとなります。その他に第9条と第11条が内容的に重複していたため、第11条を削除しました。

今年度のより研修会のお知らせはSOLTIによる配信とホームページ上での告知となり、郵送はされなくなります。ご注意ください。

今後とも臨床発達心理士会神奈川支部をよろしく願いいたします。

(文責：須田恭平)

神奈川支部総会の様子





神奈川県支部研修会報告

2019年5月19日（日）に、第1回・第2回資格更新研修会を鎌倉女子大学大船キャンパスにおいて実施しました。

第1回研修会は午前中に実施しました。次のテーマで講師の先生をお招きし、お話をうかがいました。

講演会

テーマ：不器用な子どもの評価と支援～体験を通して苦手さを共感的に理解する～

講師：松本 政悦 氏（よこはま港南地域療育センター 作業療法士）

よこはま港南地域療育センターの作業療法士の松本政悦先生をお迎えして「不器用な子どもの評価と支援～体験を通して苦手さを共感的に理解する～」というテーマで講演いただきました。

副題の通り、講演の中で様々な映像が紹介されたり、実際に体を動かしたりしながら、文献を読むだけではなかなかイメージの持ちにくい感覚統合理論や、不器用な子どもたちの苦手さについて体験的に理解することができました。

人が学習をするためには、「覚醒を保つ」「姿勢を保つ」「必要な情報を取り入れる」「不必要な刺激を遮断する」といった様々な機能を意識下で自動的に行っています。人は乳幼児期から遊びから得られる感覚刺激を通して徐々に意識下の機能を学習していきますが、発達障害の子どもはこの学習がうまくいかずに“穴”があいた状態になってしまうとのことでした。意識下で複数同時に行っていることは、意識的に実施しようとしても1つしか実行できないため、姿勢を保持しようとするとうまく話をするのができないような状態になってしまうとのことでした。また、意識下の機能を意識的に実施するとかなりエネルギーを使ってしまうため、疲れてしまうとのお話がありました。

不器用な子どもの相談になると、多くの方が支援の方法（HOW TO）を求めがちになります。しかし、松本先生のお話では、支援の方法（HOW TO）よりも苦手さの原因（WHY）を知ることが重要で、苦手さの原因がわかれば支援の方法をアイデア次第で調整、応用していけるとのことでした。松本先生のお話の中で印象的であったのは、常に子どもの心や強みが支援の中心にあることでした。保護者や支援者は行動レベルの目に見える不器用さだけに注目して修正しようと考へがちです。しかし、子どもの感覚体験を想像しながら感覚を共感することで、人に対する信頼感や人とのつながりの実感といった心の部分にもアプローチが可能であり、不器用さだけではなく、感覚や心も含めた子どもの全体像を抑えた支援が必要であるとのことでした。

松本先生の熱意と様々な映像や体験をはさまれた講義で、時間が経つのも忘れ、あっという間の大変有意義な時間となりました。（文責：須田 恭平）

松本 政悦 氏



研修会の様子





神奈川支部 2019 年度 第 2 回研修会報告

第 2 回資格更新研修会は、午後を実施しました。事例検討と 2 つの分科会で、実践報告と意見交換を行いました。

事例検討

テーマ…通常学級に在籍する ASD 学齢児へのコミュニケーション支援

事例提供：荒井 はるか 氏（特定非営利活動法人 grand-mere）

16 名の参加がありました。個人情報保護の観点から事例の詳細については記しませんが、主に次のような観点で協議を進めました。

- ・会話が一方的になりやすく同じ質問を繰り返す、新規場面では不安になりやすく、失敗や間違えることにも強い抵抗感を持つといった特徴のある子どもに対する適切な支援について
 - ・自分の不安や困り感を適切に伝えられるようにするためには、どのような支援が有効か
- 意見交換では、自分の気持ちの表現やコントロールのためには、自分の感情の自己理解と自己肯定感の育成が必要。本人の良いところ(強み)のフィードバックやその日の活動の振り返りを本人と行ない、目的や達成度を共有することなどが有効。現在取り組んでいる「SST すぐろく」「5 分間会話タイム」等でパターンの決まった表現の仕方を練習し、レパトリーを増やす取り組みや子ども同士のペアやグループでの活動も成長につながっているという意見が出されました。短時間でテーマを絞って検討する難しさも感じましたが、各分野で活躍する参加者同士が、1 つの事例について検討することは大変有意義であると感じました。(文責：橋爪 美津子)

事例検討の様子



荒井 はるか 氏



分科会 1

テーマ…高等特別支援学校における就労支援の実際～連携支援コーディネーターの立場から～
話題提供：永野 和秀 氏（横浜市二つ橋高等特別支援学校）

参加者は教育、保育、心理、福祉、保健関係の他、就労支援など多領域にわたっていました。連携支援コーディネーターである永野氏の話はとても興味深く、それぞれの支援領域から考えさせられる内容が多くありました。後期中等教育を担う高等特別支援学校は『生徒が幸せな人生を歩み、充実した生活をおくる』ため、その手段として企業就労を目指しているという話があり、学校として進む方向が明確に定められていました。一方で学齢後期における課題については、在学中の進路変更についての事例からもわかるように、学校以外の機関とのつながりがなかったり、弱かったりする生徒が多い現状があるとのことでした。そこで学校としては連携を進めるにあたり、自己理解や相談できる力を高めることが必要であると考え、それらを意識した授業や相談日を設けたり、Y-P（横浜プログラム）アセスメントを活用したりしているとの説明がありました。参加者からは障害者雇用や法定雇用率、就労定着支援の実際についての質問があり、改めて臨床発達心理士の立場から就労支援を考えることのできる貴重な時間となりました。(文責：高橋 真美)

分科会 1 の様子



永野 和秀 氏



分科会 2

テーマ…実行機能の発達を考える～注意発達とワーキングメモリ表象～(幼児期のワークショップ)

話題提供：トート・ガーボル 氏(相模女子大学)

身体を動かすワークショップ形式の分科会のため、事前申込による定員制となりましたが、定員を上回る申込があり、関心の高さがうかがわれました。

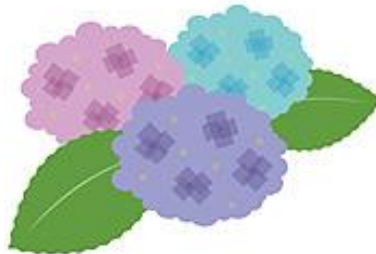
発達障害、特に ADHD との関係で耳にすることも多い「実行機能」ですが、その定義は一つではないということ、いくつかの下位要素(トート先生は、『ワーキングメモリ』『精神的柔軟性』『自制心』の3つを挙げられていました)があり、それらが相互に連携して機能する必要があることなど、講義を伺って改めてなるほどと思うことがいくつもありました。関連して、注意の発達や感覚、運動など興味深い話題も取り上げられました。早期の実行機能の発達レベルが将来にどう影響するかという研究もあり、幼児期からの適切な発達支援の必要性について考えさせられました。

講義の内容に合わせて、右手と左手で別の動きをする、腕と脚を同時に違う方向に動かすなど身体を動かしたり、遊びを紹介していただいたりして、体験を通して理解することができ、90分があったという間の楽しいワークショップとなりました。(文責：佐藤朋実)

分科会 2 の様子



トート・ガーボル 氏



神奈川支部 2019 年度 第 1・2 回研修会アンケート結果

アンケートにご協力いただきありがとうございました。ご意見・ご感想を抜粋、一部省略し、掲載させていただきます。

◆ 第 1 回研修会 講演会『不器用な子どもの評価と支援』

～体験を通して苦手さを共感的に理解する～ 講師:松本 政悦 氏

- 日々の忙しさの中でつい「How to」が先になってしまい、「Why」を考えることがおろそかになっていたことに気付いた。子どもたちの個別の「Why」を考え、子ども自身の立場に立って、その感じ方や気持ちを考えることの大切さを改めて感じた。
- 講義、体験、映像での例示と、いろいろな視点で提示され、研修内容が理解できた。特にペンや箸の操作ができるようになることの意味の解説がわかりやすかった。
- 意識下の機能のピラミッドの話は大変分かりやすく、不器用さや苦手さの根拠となる部分に、もっと目を向けなければならなかったと、ハッとさせられた。脳や身体の機能について知識を深めることで、より個々の特徴を捉えた支援ができると思った。
- 感覚統合の視点から、子ども達が苦慮している背景に想像力を働かせ、少し共感的に捉えることができた。意識下の土台となる部分の穴を治す、埋めるのではなく、楽しい体験として生活に取り入れられるように心がけ、明日からの仕事に生かしていきたい。
- 体験プログラムを使っただけの感覚統合の内容は、とても分かりやすかった。目に見えない部分だからこそ、実際に上手く使えない子どもの気持ちに寄り添えるような経験をする機会が、支援者や子どもに関わる人には重要だと思った。

◆ 第 2 回研修会 事例検討・実践報告と意見交換

<事例検討会> 通常学級に在籍する ASD 学齢児へのコミュニケーション支援

荒井 はるか 氏

- いろいろな立場の方々の、様々な視点に触れることができ、貴重な時間となった。事例を提供された方が「提供してよかった」と思える機会となれば良いと思う。自分の立場として、まだまだやらなければならないことがあると再認識した。
- 事業所で、どのように支援されているのかが分かり良かった。今は連携が当たり前になっているので、今後も民間と学校、家庭との連携がますます必要になっていくと思う。

<分科会 1> 高等特別支援学校における就労支援の実際

～連携支援コーディネーターの立場から～ 永野 和秀 氏

- 未知の分野である高等特別支援学校についてのイメージが、持てるようになった。SOSの発信に関しては、幼児期でも大切にしておき、生涯を通して必要な力だと再認識した。
- 障害受容というよりも自己理解、という考え方はとても共感できる。このことは小学生の段階から意識すると良いと考え、臨床の中で取り組むようにしている。

<分科会 2> 実行機能の発達を考える

～注意発達とワーキングメモリ表象～ トート・ガーボル 氏

- 午前中の講演会を踏まえた内容だったので、更に知識が深まった。遊びながら楽しく刺激になるものを教えていただいたので、現場では子どもの発達をみながら、様々なバリエーションにかえてやってみたい。
- ワーキングメモリ、実行機能に関する知見を、分かりやすく教えていただき整理できた。体験しながら学べたことと、多くの最新情報が得られて参考になった。

◆ 全体の運営について

- 会場が駅から近く、受付などもすべて整っていて、大変快適に研修を受けることができた。
- 年間 1 回でも良いので、ぜひ土曜日開催をしてほしい。

◆ 今後の研修会で取り上げてほしいテーマなど

- ・高齢者支援 ・愛着障害、虐待 ・通級指導教室などでの学習支援の進め方
- ・PT、STなどの職種からの発達支援 ・実行機能について (今回残念ながら参加できなかった)

ご意見ご要望ありがとうございました。これまでの研修テーマと突き合わせつつタイムリーで要望の高いテーマを取り上げていきたいと思っております。(研修担当より)



職場紹介

小島 匡治（障害者スポーツ文化センター横浜ラポール スポーツ課）

障害者スポーツ文化センター横浜ラポール（以下、ラポール）は、横浜市が設置する公共施設です。管理運営は、横浜市総合リハビリテーションセンターや市内4カ所の地域療育センターなどとともに、社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団が行っています。ラポールの事業目的は、スポーツや文化活動を通じた、障害者の健康づくりや社会参加の促進と、市域における障害者スポーツ振興の中核拠点としてのノーマライゼーション社会の実現です。そのため、障害者に適切なスポーツ活動の導入を図ることと、身近な地域でスポーツに親しめる環境を整備することを重要な役割としています。

ラポールには、大・小体育館、ボウリングルーム、プール、グラウンド、フィットネスルームなどの施設があり、さまざまな運動・スポーツを行うことができます。あわせて、初めて利用される方や新たに運動・スポーツへ挑戦する方たちへの相談窓口も設け、ニーズの整理や実施に向けてのアドバイス、各種プログラムの紹介などを行い、円滑なスポーツ導入への促しや自立して楽しんでいくための支援をしています。

スポーツ導入プログラムは取組の柱です。運動の習慣化を目標に、障害に応じて親しみやすいスポーツを紹介し、初歩技術やルール、仲間と取組むためのマナーなどの習得を図り、スポーツができたという自信や楽しいという意識を高め、家族や仲間と自発的に活動していけるように支援しています。フライングディスクやボウリング、ボッチャ、卓球は人気種目です。そして、種目別の教室や日頃の活動成果を確認できるイベントや大会を、技術レベルなどを考慮しながら種目団体や支援者と連携して実施し、仲間づくりや活動継続を支援しています。

また、培ったノウハウの地域還元も取組の柱です。障害者がスポーツを安心して継続的に行っていくためには、指導者やボランティアの存在、活動場所の充実も欠かせません。そのため、講習会などを通じた支援者養成や、スポーツ関連団体などと連携して、団体の活動などに障害者の参加の場が整備されるようにコーディネートも行っています。

これからも、より重度な障害者に対する支援の充実をコンセプトに、障害者の余暇と地域生活を支え、QOLの向上の促進のための取組に努めていきますので、皆様にラポールを活用していただくと嬉しいです。ぜひ、ホームページもご覧ください。

<http://www.yokohama-rf.jp/rapport/>

「職場紹介」大募集！

このコーナーで職場紹介をしてくださる方を募集しています。神奈川支部に所属されている方であれば、掲載させていただきます。医療、福祉、教育、司法などお互いを知り、効果的なネットワークを構築していくためにも、ぜひご協力をお願いします。

<連絡先>

神奈川支部 広報担当宛

e-mail : jacdpkanagawa@gmail.com



お知らせ

■ 神奈川支部 2019 年度 第 3 回資格更新研修会（予定）

- 日 時：2019 年 12 月 8 日（日）13：00～16：00(受付 12：30) 【1 ポイント】
 - 会 場：鎌倉女子大学 大船キャンパス 図書館棟 1 階 視聴覚ホール(定員 200 名)
 - 内 容：<講演会>「認知症の理解と支援」(仮題)
 - ・講師…鈴木 ゆめ 氏(横浜市立大学附属市民総合医療センター)
- ※ 詳細が決まりましたら、神奈川支部のホームページ、SOLTI にてお知らせします。

■ 日本臨床発達心理士会第 15 回全国大会が、下記の要領で開催されます。

会期	2019 年 9 月 28 日（土）～9 月 29 日（日）
会場	九州産業大学 人間科学部 3 号館
テーマ	臨床発達心理士の“維新”～生涯発達のアクター・アレンジャー・クリエイター～

※ 詳しくは、ホームページをご覧ください。[\(http://www.jacdp.jp/congress/\)](http://www.jacdp.jp/congress/)

■ ニュースレターの配信について

ニュースレターの配信は、現在神奈川支部の Web サイトからのみにさせて頂いており、郵送はしておりません。今回もホームページにアップした後、SOLTI にて「アップしました」と配信させて頂きました。お近くの会員の方でご存じない方がいらっしゃいましたら、神奈川支部のホームページを見て頂けますよう、是非お知らせください。

<編集後記>

昨年の西日本と同様に九州地方を豪雨が襲ったり、梅雨の長雨が続いたり、天候や気温の変動が激しい日々が続き、体調管理が難しい今日この頃ですが、皆様いかがお過ごしでしょうか。今回のニュースレターは、5月の支部総会と第1・2回資格更新研修会のご報告を中心にお届けいたしました。

今回のニュースレターにお気づきの点、ご意見・ご感想等ございましたら、今後のニュースレター充実のために生かしていきたいと思っておりますので、支部メールアドレス(jacdpkanagawa@gmail.com)にご連絡ください。

これから本格的な夏に向かいますが、皆様ご自愛ください。

(広報担当 橋爪 美津子・佐藤 朋実)